2021年1月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより 特別号 Vol.9

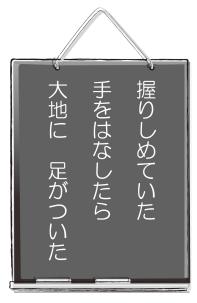
「今、この時に、親鸞聖人に遇う」 「疑いの時代に思うこと」

四国教区西讃組蓮忍寺 香川 秀夫氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

『教区だより』特別号の発行について

の只中にあります。に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安

あるのではないかと思います。考えさせられること、気づかされることも多々り前ではなくなった現実に直面し、あらためてこれまで「当たり前」にしていたことが当た

理も教えられます。常に事実の前に屈服せざるを得ないという道めり、また人間の自我分別が思い描く理想は、実はどこにも約束されていない奇跡の連続で実はどこにも約束されていない奇跡の連続で

ないかと思います。人の教えに出遇い直していくことが大切では宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖がらも、このような時だからこそ、浄土真実をいま、私たちは早期の事態終息を深く願いないま、私たちは早期の事

1。と、『教区だより』特別号を発行してまいりまと、『教区だより』特別号を発行してまいりまこの時に、親鸞聖人に遇う」というテーマのもこのような願いから、京都教務所では「今、

京都教区教化委員長 日野 隆文

今、この時に、親鸞聖人に遇う」

四国教区西讃組蓮忍寺住職 香川 秀夫「疑いの時代に思うこと」

縮小になり、 伴うこの事態で、いろいろなことが変更になり、 ŋ 揺らぎ戸惑っています。 ように考え、 た身にとって、コロナウイルス感染症の拡大に ような、リアリティのない言葉として感じてい 確かにあると気づきながらも、どこか他人事 しくなります。そういう事実が自分の周りにも 読んだりするようになってもうずいぶん久 「宗教離れ」、「寺離れ」という言葉を聞 向き合ったらい 中止になったことに対して、どの いのか、 今現在も いた \mathcal{O}

仏事の現場で

あった「宗教離れ」、「寺離れ」というその傾向 にいっそう拍車がかかっているように見えま 策の名のもとに簡素化、 厳密に言えば、 た中ではほとんどありませんが、「家族葬 確 実際に家族のみで行われる葬儀は私が経 葬儀について言えば「家族葬」という言葉 般化し、 !かにここ半年以上、葬儀や法事がコロナ対 定着してきました。「家族葬」は 「親族葬」とでも言うべきも 簡略化され、 以前 から \mathcal{O}

> あるように思えます。 別れということに向き合い、それをきっかけと という形態であっても、 ないでしょうか。たとえ「家族葬」、「親族葬」 家族を疲弊させてきたということなのではな して仏法と出会う大切な場が開かれることが いでしょうか。そしてそのことが「宗教離れ」、 失い、単なる世間的な儀礼となり、 す。それは従来型の葬儀が葬儀本来の意味を見 したようなニュアンスを感じることが という言葉で、 「寺離れ」を加速化させてきた面があるのでは 葬儀を出す家の人に何 家族、大切な人とのお いたずらに あ ッツと ŋ ま

間です。自分のことで言えば、 かされ、流してしまうことが多かったように思 11 故人の思い出を聞いたりできるのは大切な時 もさんやお孫さんといろいろなお話をしたり、 じいさん、おばあさんであった場合、その子ど じてお付き合いしてきたのが主にその家のお うまでもなく大切なことです。今までお寺を通 とゆっくりと話ができる時間を持つことは言 けているのではないでしょうか。特に家族の人 ます。 「親族葬」ということが私たちに改めて問いか ているのだと思います。 僧侶として向き合う丁寧さがいっそう問 仏事に何が願われているのかを「家族葬」、 葬儀も法事も、 規模の大小にかか 今まで時間に急

_ _ ロナ禍」ということ

ます。 同時に、 わい」とし、 スそのもののことであり、コロナウイルスに起 しています。 する今日の事態のことでありますが、それと い」ということであり、それはコロナウイル 'の間にか「コロナ禍」という言葉が定着 和感を持っています。 自分の身近のウイルス感染者を「わざ この 差別し排除する風潮にもなって 「コロナ禍」という言葉にず 「禍」とは 「わざ

疑 ウイルス保持者がいるかもしれないという 〃 分も含めてこの場にウイルス感染者、 だくためのものですが、 集う機会です。 をとりました。これらの対策は、もちろん参っ 休止しており、 春 ける措置をとり、 来られるご門徒さんに安心感を持ってい ルドをつけて等々、考えつく様々な感染対策 の永代経は内勤 先日、 換気は小まめに、 を基にしたものでもあります。 自坊で秋 久しぶりにご門徒さんがお寺に 勤めるにあたっては、 消毒液や予備のマスクを準備 0 め、 永代経法要が勤まりました。 勤行はマスクかマウスシ 毎月の同朋会も数か月間 一方でその対策は、自 あるい 密集を避 は た

法を聴聞 い」を避ける生活をしなければならないこ なっていました。 和感は、 する場が この *"*疑 コ "疑い"を前提とし い』を前提として「わ ロナ禍」という言葉 た

> らも、 てその 他者を、 ます。 すかもしれない存在として疑い、場合によって 感染状況では難しく、「世間」という大きな壁 とと判断していることが何か心に重苦しいも ていたのです。 は排除しなければならないという状況にな もあります。 とへの をもたらしています。 その 違 "疑い"を無いこととすることは今の そして自分をも「わざわい」をもたら 和感であり、 「世間」 そして「何かが違う」と感じなが そしてその を気にする自分の姿があり 息苦しさだと思い しかし、そうかと言 "疑い"を正 しいこ 、ました。 0 0

われる身として

問

時に、 という姿勢なのではないでしょうか。 にはその自己が生きる世、 自己という存在に向けられたものであると同 は質の違うものでしょう。 すが、それは「コロナ禍」における゛疑 疑うということを大切にされた方だと思 縁として」(聖典四〇〇頁)とあります。 É 疑 諸仏如来の真説に信順して」 出遇われたのでしょうか (謗を縁」 とすることで宗祖はどのような世 教行信証』後序には 他者との関係においての自己の存在、 信 世間そのものを疑う 宗祖の疑う姿勢は、 順を因とし (聖典二一〇頁) そして 然い"と 宗祖 疑ぎ いま 誇り 更 は を

仏説無量寿経』の「法を聞きて能く忘れ ず、

> 親友なり」 見て敬い 他力の 1 · 得て 信心うるひとを (聖典五〇頁)と 大きに慶べ ば、 いう言葉を宗祖 す な わち我が は

うやまいおおきによろこべ なわちわが親友ぞと 主 一世尊はほめたまう ば

ヨコの しておられるのではないでしょうか 師匠と弟子というようなタテの関係ではなく、 く敬うべき親友であると。人と人との繋がり 讃し 関係、 ておられます。弟子ということではな 水平の関係という人間観として示 聖典五〇五頁 を

と和

で出 観念的に考えることで終わるもの 事だと思います。 日 のであったのか、しっかりと確かめることが大 祖が願われた人と人との関係がどのようなも っている時代であると言えます。 は、人と人との繋がりが今まで以上に危うくな 禍」という言葉で表されている "疑い"の 係性が願われているのだと思います。 て自分に問われているのだと感じています。 それは宗祖と法然上人の関係であり、 お寺を訪ねてくるご門徒さんとどう接する かというリアルな生活から始まる問題と そこには .遇われた人々との関係でもあるの "疑い"を超え、 そしてそれは決して頭の中 世間を超えた関 ではなく、明 改めて宗 「コロ でし 流 時 罪 で 代 ナ ょ 先

教務所からのお知らせ

(住職任命者)

10110年十二月十三日付 近江第二組 近江第二十五西組 榮敬寺 願林寺 中野

晃人

佐治 敬順

一
敬称略

《年末・年始の事務休暇について》

務所事務の取り扱いを休止します。 年末・年始事務休暇として、左記の期間は教 (期間中の授与物のお渡しや院号法名の

申請 合は、 ようお願いいたします。 左記緊急連絡先までご連絡いただきます 収骨の受付等は緊急に含みません)の場

[事務休暇の期間]

[緊急連絡先(教務所携帯電話)] 二〇二〇年十二月二十九日 一二年 — 月 五日 火 火

「新型コロナウイルス感染症影響下における 〇九〇一三七一九一七九八二

します。

近江第六組

法泉寺前住職

松本

昭

九十一歳

寺院教化活動の工夫に関する調査」報告》

真宗教化センター 寺院活性化支援室より、

10110年十一月三日

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表

《敬弔》

近江第二十五西組 光傳寺前住職

早水 信哉

九十二歳

10110年十月二十八日

近江第十一組

慶照寺坊守

宮戸 徳代

八十四歳

10110年十一月1

近江第九組

本正寺前坊守

松澤 喜美

九十九歳

されております。

https://jodo-shinshu.info/covid-19-survey/

計結果が、しんらん交流館ホームページに公開 全国の組長を対象に実施された調査の単純集

10110年十一月八日

近江第七組 本啓寺前坊守

那須 宣子

九十三歳

10110年十一月五日

『真宗』 2020 年 12 月号4頁に詳細が掲 載されておりますの でご覧ください。

駐在日記

「マグロを捌く包丁がほしい」。いわゆる包丁のかたちをしたモノではなく、刀みたいなかたちをした 十数万円する代物だ。この言葉を聞いた瞬間、この願いを叶えてあげられない様々な言い訳が瞬時に 浮かび上がる▼仮に、購入に耐えうる財力があったとしても、ほとんど使う機会がない大きな包丁を 一体どこにしまっておくというのだ。許可を得ないと銃刀法違反?に問われるのでないか。この包丁 を満足させるだけのマグロの大きさや値段は如何ほどになるのか。恐ろしい▼11 歳を迎える長男。思 えば3歳の誕生日に、自分のことは自分でできる子に育ってほしいと、子ども包丁をプレゼントして以 来、包丁遍歴がある。釣りに興味を覚えた頃、子ども包丁では釣った魚をうまく捌けず出刃包丁を購 入。出刃では捌きにくい小魚用に小型の包丁や、おろした切り身を薄く切り分けるための刺身包丁。 エラがさっくりと切り取れる切れ味抜群のハサミもある▼不穏な空気を察知した長男は、無理を聞い てくれる祖父にパソコンをおねだり。なぜ、マグロ包丁→パソコン?と思ったが、動画でさまざまな 魚の捌き方を調べる様子。健気な姿勢に誕生日当日、50cm ほどのヒラメをつれあいに買ってきてもら い、親としてプレゼント。長男が自前の包丁たちで腕を振るってくれた▼包丁の切れ味もさることな がら、祖父・父二代に身銭を切らせる長男の切れ味が一番バツグンであった。(駐在教導 佐々木 大)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」 特別号 Vol.9

発行人 日野 隆文 (真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入 Tel: 075 (351) 5260 Fax: 075 (351) 5256

発行日 2021 (令和3) 年1月1日 メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームペ

京都教務所

